

島津義弘ゆかりの地ガイドブック

義弘と始良

始良に刻まれし 雄武英略の足跡

AIRA-CITY that YOSHIHIRO SHIMADZU Lived in...



島津義弘公ゆかりの地あいらPRプロジェクト実行委員会

始良市観光MAP



島津義弘公ゆかりの地あい
PR プロジェクト実行委員会
(事務局 始良市役所商工観光課)
TEL 0995-66-3145
URL <http://www.city.aira.lg.jp/>

「まち」を元気にする、観光案内アプリ
ココシル あいら 鹿児島
(愛らしい 始良市)



始良市歴史民俗資料館



始良市東餅田498 ☎0995-65-1553
開館: 9時~17時 入館料: 無料
休館日: 月(祝日の場合は翌日) / 毎月25日(土日は除く) / 年末年始

加治木郷土館



始良市加治木町飯屋町250 ☎0995-62-0130
開館: 9時~17時 入館料: 無料
休館日: 月(祝日の場合は翌日) / 年末年始

合戦記

岩剣城の戦い

天文十二年(一五五四年)

西大隅(現在の始良市一帯)の覇権をめぐる、蒲生氏・祁答院氏と対立。ほかに東郷氏・入来院氏・北原氏・菱刈氏も敵方を支援しました。やがて全面戦争へと突入。この戦いは「大隅合戦」とも呼ばれています。島津軍は岩剣城を攻めます。この戦いでは島津貴久の三人の息子(義久・義弘・歳久)も初陣を飾りました。義弘は白銀坂に陣取り、大きな戦功を挙げました。この勝利から島津軍は勢いづき平山城や松坂城など敵方の拠点を落としていきました。弘治三年(一五五七)に蒲生氏の本拠地である蒲生城を陥落させ、蒲生氏は逃亡。西大隅を平定しました。

木崎原の戦い

元龜三年(一五七二年)

義弘が守る日向国真幸院(宮崎県えびの市)に伊東氏が約三千の兵で攻め寄せてきました。対する義弘の手勢は約三百。義弘はたくみな用兵で劣勢をひっくり返して勝利。この戦いを機に、伊東氏は勢いを失っていきます。

耳川の戦い(高城川の戦い)

天正六年(一五七六年)

島津家が日向国を掌握すると伊東氏は豊後の大友氏を頼り、旧領の奪還を要請します。これを受けて大友氏が日向へ侵攻してきます。島津氏は当主の義久をはじめ四兄弟が揃って出陣。総力戦で大友氏の太軍勢を打ち破りました。

豊臣氏の大軍勢に抗戦

天正十四年(一五八六年)～一五八七年

大友氏の要請で豊臣秀吉の大軍勢が押し寄せてきます。義弘は最前線で戦うも大軍の前に敗走。本拠地である真幸院の飯野城に籠城して抵抗を続けましたが、義久が降伏したのを受けて義弘も豊臣家の軍門に降りました。

泗川の戦い

慶長三年(一五九八年)

朝鮮の泗川で明・朝鮮連合軍五万～二万(数字は諸説あり)と激突。島津隊は六～七千で迎え撃ち、大きな兵力差にも関わらず敵を壊滅させました。

関ヶ原での敵中突破

慶長五年(一六〇〇年)

豊臣秀吉の死後、徳川家康が権力を掌握し始めます。これに対抗し、石田三成らが画策して挙兵。徳川方(東軍)と反徳川勢力(西軍)がおつかり、美濃国(岐阜県)の関ヶ原で大合戦となりました。島津義弘は西軍につきます。国許から兵が送られず、千～千五百とわずかな手勢での参戦でした。決戦は旧暦九月十五日、小早川、秀秋の裏切りもあって、あつてなく、も半日で決着します。西軍が崩れていく中で、島津軍は戦場に取残り、義弘が退路として選んだのは、なんと正面でした。徳川本隊の前をかすめて戦場を脱出。撤退線は仕断なもので、甥の島津豊久や家老の長寿院盛淳などが命を落としました。その後、義弘は大阪で家族を奪還し、薩摩まで生還。最後まで付き従った兵は数十名にまで減っていました。



始良市に伝わる 島津義弘ゆかりのもの



帖佐人形

義弘が連れ帰った朝鮮の陶工たちが、ふるさとをしのんで作り始めたともいわれています。



くも合戦

朝鮮出兵で兵士を鼓舞するために行われたのが始まりともされています。



養蜂

義弘は朝鮮から蜂飼いを連れ帰りました。加治木に養蜂の試験場を設けさせ、養蜂をこの地に根付かせました。



太鼓踊り

江戸で流行した疫病が急仏踊りで沈静化したことを知った義弘が領内に持ち込みました。



あくまき

もち米を灰汁につけた保存食。薩摩では兵糧食として利用され、関ヶ原の戦いにも持っていたともされています。



加治木まんじゅう

義弘が住む加治木館の橋を架ける際に、休憩の茶菓子として出されたのが始まりとも。



龍門司焼

義弘は朝鮮から陶工を連れ帰り、帖佐や加治木で製陶を行わせました。龍門司焼は義弘に仕えた朝鮮陶工の芳仲の子孫が開いたものです。